

昭和萬葉集

卷十八



昭和萬葉集

卷十八

昭和四十八年

講談社

昭和萬葉集 卷十八

定価 一、六〇〇円

昭和五十五年七月二十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号 一一二

電話 東京〇三九四五一一二二（大代表）

振替 東京八一三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 和田製本工業株式会社

用紙 東洋クロス株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九八〇年 Printed in Japan



0392-441188-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷十八／目次

口絵
凡例

汚れゆく日本

食えない魚

10

工場廃水

13

水俣病判決

15

スモン

16

カドミウム汚染

17

大気汚染

17

公害を怒る

18

列島改造

20

買占め

23

石油ショック

23

買溜め・売惜しみ

24

日本さまざこま

過激派に思う

26

反戦への願い

28

老人とこども

戦争の傷跡

還らぬ人を

39

原爆の爪跡

43

銃後にありて

46

終戦の日

47

抑留・引揚

47

消えぬ戦禍

48

戦跡を訪ねて

48

わが戦後

51

ベトナム和平

30

伊勢遷宮

34

日中国交回復

35

海外の波動

35

テレビに思う

37

時の憂い

38

われ老いぬ
老夫婦

61

58

老の日常	63
老友	65
老の生きがい	66
老の嘆き	68
老の予感	71
老をみとる	72
老とともに	73
恍惚の人	77
安楽死	79
老人問題	79
鍵っ子・テレビっ子	82
現代っ子	83
受験生の周辺	85
生きゆく日々	
朝の歌	90
夕べの歌	90
夜の歌	92
眠りの前に	94
夢	95
ひとりの歌	96
生きゆく日々	97

生活の歌	
インフレに悩む	
きびしい暮らし	
小さな幸せ	105
厨べの歌	107
アパート	109
家を求めて	109
住宅ブーム	111
わが家	112
酒の歌	113
生活の断片	114
くらしの歌声	116
郷愁片々	117
誕生日	118
同窓会	119
車中にて	120
高層ビル	121
街頭で	122
地下街	125
ある光景	126
	104 101

きびしい農業

休耕田 128

農地を売る

過疎・離農

出稼ぎ 133

農に生きる

米作り 137

農作業 141

家畜 143

養蚕 145

果樹園 146

農村風景 148

仕事の歌

海べにはたらく

山にはたらく

鉱山にて 152

工場にて 153

151 150

工事場にて

職人の歌

鉄道員 157

順法闘争

教師の歌 158

医師 161

商人の歌 163

さまざまな職業

小企業主 168

はたらく人々

通勤 169

週休二日制 170

職場にて

求職・失業 171

定年・退職

団交・スト

管理の立場

春闘 178

177 175 172 169

愛と死

愛の歌

父 184

182

母 186

病む父母

父母の死 188

父母を偲ぶ 191

四季の歌

春 236
 さくら花 237
 春の花々 238
 夏 240
 夏の花々 243
 秋 244
 秋の草花 246
 紅葉 247

自然の姿

冬 248
 雪 250
 歳晚・新年 252
 日月風雨 254
 川 255
 海 256
 水のほとり 258
 山と溪谷 259

夫 194
 病む夫 195
 亡き夫 197
 妻 199
 病む妻 201
 亡き妻 202
 みどりご・幼な子 203
 病む子 207
 亡き子 207
 子供の情景 209
 反抗期 210
 わが子 212
 嫁ぐ娘 214

病者の歌

嫁と姑 215
 孫 218
 兄弟 220
 親族 221
 挽歌 222
 療養の日々 223
 癌 226
 手術 227
 ハンセン氏病 228
 不自由な体 229
 病いと闘う 232

VI

鳥	263
動物	265
魚	266
虫	268
草木	268
旅	269

旅情	272
名所・旧跡	273
仏	275
機上にて	275
海外の旅	276
ふるさと	278

くさぐさの歌

外地にて	282
世代の峠	283
美術・学芸	285
死刑囚の歌	287
在日朝鮮人の歌	288
日本の風習	289

折々の歌

新世代の歌	291
心象	293
さまざまな想い	295
女歌	299
民俗・土俗	303
折々の歌	304

個の必然的な表現〈昭和短歌史概論〉

変質する「戦後日本」〈昭和史私論〉——山田宗睦

年表

作者略歴・索引

■脚注目次

汚れゆく日本	10	戦争の足跡	40	生活の歌	102	僻地教育	161
汚染魚問題とPCB	12	学徒出陣三〇周年	40	高進するインフレ	102	はたち／＼人々	
工場排水	14	原水爆禁止運動	44	円の変動相場制移行	103	週休二日制	170
水俣病裁判	15	戦傷病者・戦没者遺族への援護	48	パートタイム	105	祝日振替の実施	171
スモン訴訟	16	戦災の記録	52	主婦の生きがい	107	愛と死	
カドミウム汚染	17	老人レジャー	58	冷凍食品の普及	108	青年の意識	212
大気汚染	18	高齢化社会	58	マンション・ブームの終焉	110	原理運動	213
公害反対の運動	20	老人対策本部	60	ローン制度	110	結婚式の華美	215
列島改造の余波	21	老人の生きがい	66	プレハブ住宅	111	病者の歌	
総合商社の社会的責任	22	老人福祉問題	66	マイホーム志向	112	医療事故	227
石油危機	24	老人バス	68	ゴミ戦争	114	身体障害者乗車拒否事件	231
OPEC	25	老人と家庭	69	路面電車の魅力	118	四季の歌	
日本とオーストラリア	29	老人の自殺	76	街路の改造	123	季節感の変化	236
ナイキ違憲判決	29	老人の医療	79	地下街	125	自然の姿	
靖国法案	30	老人と仕事	80	きびしい農業	123	自然保護政策	260
ベトナム和平協定	31	老人の年金	80	農業の直面する危機	128	旅のマナー	272
伊勢遷宮	34	鍵っ子	81	農地の転用	130	セックスアニマル	276
中国ブーム	35	テレビっ子	82	出稼ぎ	133	自然の歌	
中東戦争	36	非行問題	84	野菜の値上がり	141	江崎玲於奈ノーベル物理学賞受	286
アジエンデ政権の崩壊	37	大学進学問題	85	ミカンの収穫波動	147		
金権政治への不満	38	生きゆく日々	86	仕事の歌	158		
金大中事件	38	生きがいと終末観	99	国鉄の財政再建計画	159		
				反合理化闘争と上尾暴動	159		

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に

つくられた短歌を対象として、一般投稿歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌等々を、選者の選をへて編纂した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もしくは初出掲載誌発刊年等）によって分類し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分類・配列した。また分類ごとに初出作品の上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等が必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末につけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は；で示した。

〔例〕大8：〈生年のみ判明〉
；昭20〈没年のみ判明〉

・出典は、原則として編集部が典拠としたものを示した。『』は歌集、『』は新聞・雑誌などを、また（ ）内の数字は、刊行年、刊行年月（日）号を示す。

〔例〕形相（23）〈昭和二十三年刊〉
アララギ（17・2）〈雑誌「アララギ」昭和十七年二月号〉

朝日新聞（17・12・8）〈昭和十七年十二月八日号〉

・二首以上の収録作品で、出典が複数となっている場合の表示。

〔例〕アララギ（17・9、10）〈九月号と十月号〉
アララギ（17・9）Ⅱ三首（18・3）Ⅱ二首〈十七年九月号から三

首、十八年三月号から二首〉

・必要に応じて、出典の下に原典につけられた小題を付した。

〔例〕露原（22）食生活Ⅱ歌集Ⅱ露原にある「食生活」という小題のついた一連からの抄出

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表の典拠等をへゝ内に記した。

〔例〕北支にて、〈日記より〉
沖修二 阿南惟義伝（45）より

5 戦後の現代かな使用による作品を除いて、作品の表記は旧かな使用を原則とした。なお、漢字は原則として新字体を使用し、よみがな（ルビ）は編集部判断で加減した。

6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお（ ）内は執筆者名。

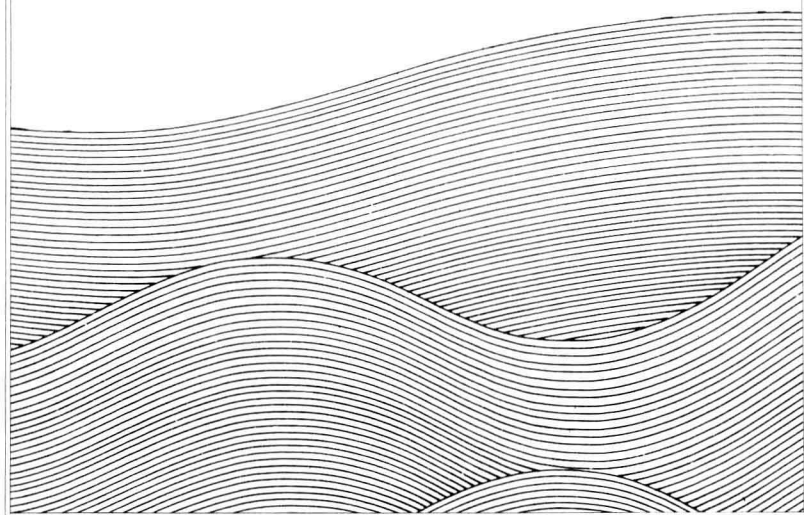
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられていた詞書は、必要に応じて「詞書」と頭につけて脚注欄に引用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当する脚注の頭に、＊または＊＊をくりかえし付して、対応させた。

■本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在不明等のため、連絡のとれない方があります。巻末作者略歴・索引の＊印を付した作者がこれに該当しますが、お心あたりの方は、編集部まで御一報くださいますようお願いいたします。

I



汚れゆく日本

田中耕治 大11「アララギ」(48・10)

食えない魚

安全度の基準を示せ魚売^{うを}るは毒売^{うを}るごとく吾は苦しむ
悪き面のみを大きく報道す魚食の不安煽るごとくに
売上げの半減に沈む家の中子等はやさしく吾にものいふ

赤尾きく 大15「朝日新聞」(48・7・24)

汚染なきを必死に告げつつ売り歩くわれもわが荷も濡れつつめたし

森本美和子 「アララギ」(48・10)

公害を言ふ客多くうれのこる魚の煮つけを夜毎わが捨つ

大和てるみ 昭2「山茶花」(48・9)

夕闇に燐光放つ汚染魚を埋めむと深くふかく穴掘る

森田らん 大1

伊豆沖の公害なきを言ひ足して鰺^{あぢ}の生鮭客に運べり

汚れゆく日本 一九七〇年代には
いって、「公害」という用語とともに「環境汚染」「環境破壊」という用語が、ひろく使用されるようになった。それは一九六〇年代末に、欧米各国で環境問題が本格的に取り上げられてから、日本の行政においても、おくれはせながら環境問題への眼がようやく向けられるようになり、昭和四十六年に環境庁が設置されるなど、環境問題とその対策が正面に登場してきたからである。しかし、このような情勢如何にかかわらず、国民の眼に、汚染・破壊の度を深めつつある環境が大きく映りはじめ、そこから環境という用語が定着したといえよう。昭和四十八年、水銀・PCB汚染が表面化し、汚染魚の発生は漁民の生活を脅かした。国土の汚染はとどまることを知らず、そこから発生する被害については、国も企業も責任を回避しようとした。その意味では、国士だけでなく精神的「汚染」が、

北川たか子 「アララギ」(48・10)

P C B の汚染伝はるふるさとの魚を商ひ老ゆる父母*

杉山道子 昭7~

捨てるために漁られし魚よ網の中に躍り汚染の海よりあがる

大津 正 大8~ 「潮音」(48・10)

すつる魚の漁に出づると瀬戸内の徳山湾の漁師つぶやく**

佐伯森平 明42~ 「毎日新聞」(48・1・22)

ふる里の海汚されて鰯網引く掛け声の今はきこえず
いわしあみ

平野静子 大3~ 「毎日新聞」(48・7・15)

漁業権捨つる日近し海濁りしらす漁なき浜はさびれぬ*

ふるたみのる 明40~ 「香川歌人」(48・9)

政治呪ひ海を返せと叫ばへど老多ければ街に届かぬ
おら おい

大城泰子 昭17~ 「好日」(48・11)

水銀に汚染されたる魚かもあざやかに赤身切り落とされし
さかな

高度成長の結果とともに深まつて
いったのである(原田勝正)

* P C B = polychlorinated biphenyl
カネミ油症の原因物質、人体に入
ると肝臓中の解毒酵素を増し、副
腎ホルモン、性ホルモンを破壊す
るという。

** 徳山高し山口県徳山市、大島半島
と大津島などに開かれた湾。昭和
四十八年六月に、徳山曹達と東洋
曹達の二工場で合わせて五〇八
の水銀が未回収たつことがわか
れ、漁民は自主休業に追い込まれ
た。

* 漁業権 漁業を独占的に営む権
利。漁業法に基づいて、定置漁業
権・共同漁業権・区画漁業権があ
る。
しらすイワシ、イカナゴなどの
稚魚。透明で、しらすほどに
する。

榎本久一 昭6「塔」(48・8)

海色に昏るる厨くりやに帰り来て奇形の魚を怖れいる妻

沖吉ヨシエ 「毎日新聞」(48・6・3)

安ければ汚染の海に獲れしかと買ひまよひをり魚売られみて

丹羽歌子 大7「多麻河伯」(48・39号)

汚染度の不安は去らず店頭にしお吹く黒き貝を見つむる

柳 檀 昭19「アララギ」(49・1)

PCBの胎児に及ぶを怖れつつ二箇月ぶりに魚求めぬ

堀 淑江 明43「アララギ」(49・1)

産地問へば不機嫌になる魚屋に何も言ひ得ず魚を買ひたり

田中義規 昭4「アララギ」(48・10)

水銀の汚染にいたくこだはりて妻は冷凍魚今日も買ひたり

岸田 隆 大3「冬の旅」(51)

食ひ馴れし魚をうましと今日も食ふ海知りがたく汚染知りがたく

汚染魚問題とPCB 昭和四十八年六月福井県敦賀湾の魚介が東洋紡績敦賀工場から排出されたPCBによって汚染され、同社は漁民と県の強い要請でPCB即時使用禁止と約一〇億円の漁業補償をした。六月四日水産庁発表の一四水域における魚介類PCB汚染調査によると、九水域で汚染が許容水準(三PPM)をこえ、播磨灘では漁獲物の二六割が基準をこえていたし、別府湾の天然うなぎでは一三〇PPMという汚染がみられた。PCB(ポリ塩化ビフェニール)は熱可塑性・絶縁性が高く、絶縁体や合成樹脂の可塑剤として広く使用されたが、油性で魚の脂肪・肝臓などに蓄積され、人体に入ると肝臓障害などの症状を起こす。すでに昭和四十四年西日本のいわゆるカネミ油症を引き起こし、各地で汚染魚が発見され、四十七年生産中止の措置が多かったが、使用をつづける企業が多かった。四十八年には水銀汚染魚も問題となり、漁民の公害企業に対する抗議運動が激化した。(原田)

川路ゆみ 大9「アララギ」(48・9)

多く食べねばわが町の魚は心配なし県と町よりチラシ配り来る

加藤 正 大11「アララギ」(48・10)

試験結果はPCB基準値以下なれば知事ら名士が魚食ふところ

藤 絹子 大15「昭49」「古今」(48・2)

放射能浴びたる魚を思ひをり魚となりわれは横たはりつつ

坂口末義 明42「アララギ」(48・10)

浅蜷あさりにも汚染害のありといふ天草の海に夕日てり初はじむ*

藤咲和子 昭2「まひる野」(48・9)

病む海と報ぜられつつ汚染魚の奇形に育つ明日をおそるる

紫田栄治 「毎日新聞」(48・2・4)

近海魚オール汚染の累々と富みたる国はかく無残なり**

赤沢郁満 明42「昭53」「まひる野」(48・11)

工場廃水

工場より吐き出さるる濁り水粘着感の色をもちある

*天草の海は熊本県南西部、天草灘
など天草諸島付近の海域。

**累々＝重なりあつたさま。

魚棲まず蛙も鳴かぬこの川は濁りて白き被膜が鎖す

印通寺 博 大6「アララギ」(48・7)

政治には関り持つなど手渡さる公害苦情相談員の辞令

行政処分受けし工場よりの廃液が暗きがままに滞りをり

大橋栄一 昭16「アララギ」(48・9)

公害にかかはりのなき小企業吾が社と傍観してこし廃液のこと

稲垣 道 昭6「まひる野」(48・1)

工場の廃液海に入る渚死魚漂いて異臭を放つ

渡辺和子 「毎日新聞」(48・4・15)

廃液の海ひたひたと海苔粗朶を脅かしつつ春の色もつ

北原弥生 大13「まひる野」(48・2)

海苔浜の組まれずなりし渚べに廃油のにはふ藻が乾きをり

山下秀之助 明30「昭49 晩色」(49)

市谷見附の橋の手摺に乗りかかりわれも見んとす死魚あまた浮くを

工場排水 昭和四十八年には、地方公共団体か、ようやく工場排水

に対する点検と処置をとりはしめた。これは、三月二十日の水保病

訴訟判決によって通産省が企業による水質汚染の事前防止措置をと

る構えを余儀なくされ、全国主要河川港湾沿岸地域の点検計画を立

づけるようになったことも関係している。しかし、それ以上に住民

の被害が続発し、住民からの要求を無視できなくなったからといえ

よう。静岡県では富士地区の製紙工場に対する立入禁止検査を強

化、一月から十二月までに五八工場が操業停止処分を受けた。滋賀

県では四月に公害防止条例を全面改正して国の基準以上にきびしい規制措置をとり、とくに汚染の

はげしい琵琶湖周辺の工場の排水規制をはじめた。(原田)

*海苔粗朶 海苔を付着させるために浅い海中に立てた木や竹の枝海苔浜ともいう。

*市谷見附 東京都新宿区の東部にある地名。皇居の外濠に面し、国電市谷駅から橋をわたった地を市谷見附と称した。